

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32680

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370029

研究課題名(和文) イギリス思想における常識と啓蒙の系譜とその現代的意義についての研究

研究課題名(英文) The Study of the Philosophies of Common Sense and Enlightenment in Britain and their implications for contemporary thoughts

研究代表者

大谷 弘(OHTANI, Hiroshi)

武蔵野大学・人間科学部・講師

研究者番号：30584825

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「常識に依拠しながらも啓蒙的である思想」をイギリス哲学の中に探り、その現代的な可能性を探った。具体的には、(i)スコットランド常識学派を中心とするスコットランド啓蒙思想における常識思想の検討、(ii)ムーア、ウィットゲンシュタインなど20世紀ケンブリッジの常識思想、(iii)スコットランド啓蒙思想のアメリカ建国思想への影響の検討などを行った。

具体的な研究成果としては、各研究者の論文、学会発表の他、日本イギリス哲学会第40回研究大会においてシンポジウムを開催するとともに、研究成果を集めた研究報告書を開催した。

研究成果の概要(英文)：In this research, we explored the common sense philosophies that can also be characterized as "enlightenment" in the British traditions. Our studies include the study of (i) the common sense philosophy in Scottish enlightenment, (ii) the common sense philosophies of 20th century Cambridge philosophers such as G.E. Moore and Wittgenstein, and (iii) the influence of the Scottish philosophy to the thoughts of the Founding Fathers of America.

We published several papers on these topics as well as made presentations in conferences. Also, we organized a symposium at the 40th annual Conference of The Japanese Society for British Philosophy, and we have edited The report of the research results in which papers of our fellow scholars are included.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：常識 イン アダム・ファーガスン 啓蒙 トマス・リード スコットランド啓蒙思想 スコットランド常識学派 ウィットゲンシュタイン コモン・センス

1. 研究開始当初の背景

啓蒙とは、既存の権威や思考の枠組みを問い直し吟味する精神である。これは17世紀から18世紀にかけてのいわゆる啓蒙思想においては教会などの宗教的権威を理性や経験の明証性という個人に内在する権威へと置き換えていくことを意味した。(あるいは少なくとも通俗的な啓蒙思想解釈ではそのように理解されている。)しかし、そのような個人主義的な「啓蒙」理解は今日において大きな意義を持ち得ない。もちろん、例えばロックやヒュームといった啓蒙の哲学者の哲学的遺産は否定できるものではない。だが、明証性のような個人主義的尺度を最終的権威とする限り、個人個人が互いに調停不可能な権威を持つとする安易な相対主義へと堕してしまう可能性を秘めているのである。特に今日のような多様化が進行し、またソーシャルメディアが普及し、誰もが意見や情報の発信者となることが可能となった時代においては、個人主義的な啓蒙の観念は相対主義的思考の前に無力である。しかし、そのことは、既存の権威への盲従が現代における最良の選択肢であることを意味しない。実際、東日本大震災やそれに続く原発事故は、硬直した権威主義的体制がいかに危ういものであるかを改めて示すものであったと言えよう。既存の権威を問い直しながらも、膨大な情報の奔流に翻弄されることなく適切な判断を下すことを可能とするような「吟味する精神」としての啓蒙精神の必要性は今日ますます高まっているのである。

このような問題意識の下に過去の思想、哲学を振り返るとき、我々はイギリスに非個人主義的な啓蒙的哲学者たちを数多く見出すことができる。すなわち、18世紀の「スコットランド啓蒙」の一角を占めるスコットランド常識学派の哲学者たち、そして、20世紀ケンブリッジのムーアやワイトゲンシュタインといった哲学者たちである。彼らは「常識」のような社会の成員に共有されている事柄に依拠しつつ、既存の権威や思想を問い直す哲学的活動を行っていたのである。

従って、我々のキャッチフレーズは「18世紀スコットランドから20世紀ケンブリッジへ」となる。もちろん、18世紀スコットランドと20世紀ケンブリッジは非常に異なった思想空間を構成しており、安易に両者の「常識と啓蒙」を同一視してよいわけではない。我々がなすべきは安易にこのキャッチフレーズの下に異なる哲学者たちをはめ込むことではなく、それぞれの哲学者たちが置かれている思想的文脈に注意を払いつつ、それぞれの「常識と啓蒙」の内実を明らかにしていくことである。すなわち、「18世紀スコットランドから20世紀ケンブリッジへ」というキャッチフレーズにゆるやかにガイドされながら、今を生きる我々自身に示唆を与えうる「常識と啓蒙」についての哲学的洞察を収集することが、本研究の目的である。

以上のような問題意識の下、この研究は開始された。その特徴は三点にまとめることができる。すなわち、第一に従来、あまり注目されることのなかった「常識に依拠した啓蒙」に焦点をあて、その哲学的、思想史的意義を解明することを目指している点である。「18世紀スコットランドから20世紀ケンブリッジへ」と言われるならば、我々はヒュームからラッセルへ向かい、更には論理実証主義へと流れ込むような一種の科学主義的な啓蒙思想の系譜を考えてしまいそうである。しかし、本研究はこのキャッチフレーズの下に、リード、ファーガスン、ムーア、ワイトゲンシュタインといった哲学者たちに注目し、彼らの常識と啓蒙の哲学を検討することとした。また、そこから派生する問題圏として、パークやパークリなど同時代の哲学者の常識論やカント、ハイデガーなどドイツ哲学の思想との比較検討をも目的とした。

第二に、本研究は従来没交渉であった哲学研究者と思想史研究者の共同研究の形をとっている。哲学研究者と思想史研究者は同じような哲学者や思想家を扱いながらも、相互の交流は必ずしも成立していなかった。本研究は研究代表者大谷が哲学研究者を取りまとめ、研究分担者の青木が思想史研究者を取りまとめるという形で、両者が互いの分野を尊重しつつも議論を重ねるということを目指した。

第三の特徴は、本研究を担うのは若手から中堅の研究者であるという点である。常勤のポストに就く研究者については、学内の業務等で十分な研究時間を確保することが困難な状況ではあるものの、本研究の参加者はいずれも最先端の研究にキャッチアップしつつオリジナリティのある研究を展開中の研究者たちである。

2. 研究の目的

(1)18世紀スコットランド啓蒙思想における「常識」観念の思想史的検討を行う。具体的には、アダム・ファーガスン、トマス・リードらの常識思想を検討し、その「常識と啓蒙」の思想の諸相を解明する。

また、スコットランド啓蒙思想の「常識」概念が、植民地期、建国期以降のアメリカ思想や社会にどのような影響を与えたのか、そして、アメリカにおいてその思想がどのように変容したのか、という点についても、思想史的に後付け、検討を行う。

(2)18世紀スコットランド啓蒙思想と関連する諸思想の比較検討を行う。具体的には、パークやイギリス経験論の哲学者たちなどの、同時代のイギリス思想や、カント、ハイデガーなどのドイツ哲学における常識思想との比較を行い、その思想史的、哲学的特徴を明らかにする。

(3)20世紀ケンブリッジにおける、G.E.ムー

アや L.ウィトゲンシュタインの「常識と啓蒙」の思想を哲学的に検討する。特に、ウィトゲンシュタインについては、近年研究が盛んとなっているその哲学的方法論に注目し、単に常識を切り札とする「常識哲学」としてではなく、その哲学における常識の位置付けを分析し、提示する。また、その上で、(1)の研究成果を参照しつつ、18世紀スコットランドの「常識と啓蒙」の思想との比較を行う。

(3)(1)と(2)の研究成果に依拠しつつ、現代を生きる我々にとって意義のある「常識と啓蒙」の思想を解明する。

3. 研究の方法

基礎的なテキストの分析を進めるとともに、研究会を開催し、各自の研究成果の共有をはかる。特に、従来は没交渉であった哲学研究者と思想史研究者の共同研究の形を取り、両分野に蓄積されている成果を比較、参照しつつ、議論を積み重ねる。

4. 研究成果

(1)スコットランド啓蒙思想における「常識」観念の思想史的解明：スコットランド啓蒙思想における「常識」観念を、その思想史的な位置づけを「ローマ古典・ルネサンス人文主義」にさかのぼる形で解明することで明らかにした。また、スコットランドの常識思想のアメリカ建国思想への影響についても、特にフランクリンのケースを中心に明らかにした。

(2)20世紀ケンブリッジの「常識と啓蒙」の哲学の検討：特にウィトゲンシュタインの「常識」をその哲学的方法と関連付けて解明した。それによると、ウィトゲンシュタインの哲学的方法論において、「常識」は重要な役割を果たしているが、決して、知的探求の終点という意味での反啓蒙的な権威として働いているわけではない、ということが明らかになった。

また、ウィトゲンシュタインとトマス・リードの常識思想には、常識が哲学的方法論において役割を持つという重要な共通点があるということを明らかにし、両者の共通点と相違点についても一定の理解が得られた。

他に、ウィトゲンシュタインの「哲学的治療」「世界像」などの観念についても、検討を行った。

(3)スコットランド啓蒙思想と同時代の常識思想の比較：スコットランド啓蒙思想と同時代のバークやバークリらの常識思想とリードの常識思想の比較も行い、両者の相違点について、一定の理解が得られた。

(4)ドイツ哲学との比較：カントやハイデガーらの常識観念の検討を行い、イギリス思想の常識観念との比較の基礎を確保した。また、特にカントについては、その常識論と啓蒙論

の関係についても検討を行った。

(5)哲学分野と思想史分野の交流および議論の相互参照：「常識と啓蒙研究会」を開催し、そこにおいて、従来は没交渉であった哲学研究者と思想史研究者の間での議論を行った。研究会の議論は、相互の分野に対する敬意をはらいつつ、それぞれの分野に蓄積されている洞察を交換することとなった。それにより、従来は比較されることのなかった両分野における概念の比較がなされた。例えば、思想史における「マナーズ」の概念と哲学における「生活形式」の概念が、比較検討され、議論された。

また、最終年度には日本イギリス哲学会第40回研究大会において、シンポジウム「イギリス思想における常識と啓蒙の系譜 18世紀スコットランドから20世紀ケンブリッジへ」を開催し、哲学研究者3名、思想史研究者3名による討論および、会場との意見交換を行った。

(6)国際的な研究への貢献

本研究では、国内の研究者に向けた書籍や論文の発表にとどまらず、国際的な研究活動への貢献も意図した。特に、若手の研究者を中心に、国際学会での発表や国際誌への論文の投稿を推進した。その結果、査読付き国際誌への論文の掲載4本(学会プロシーディングスへの掲載を含む)、国際学会での発表4本という成果をあげることができた。

また研究代表者大谷は2014年度長期にわたってイギリスのイーストアングリア大学(Norwich, UK)に滞在し、現地の研究者との交流を持つとともに、各種学会に参加し、最新の研究状況に関する情報収集を行った。現在も、海外の研究者との連絡は続いており、今後の国際的な研究への発展が期待される。

(7)研究成果報告書の作成

『研究成果報告書 イギリス思想における常識と啓蒙の系譜とその現代的意義についての研究』(大谷 弘・青木裕子 編、武蔵野大学人間科学部 大谷 弘研究室、2016年3月、128pp)を刊行し、研究成果を関係各所に配布した。若手、中堅の研究者を中心に、「常識と啓蒙」の哲学、思想について、思想史と哲学の両分野の論文を集めることができた。なお、この研究成果報告書の作成に当たっては、検討会を開催するとともに、編者の研究代表者大谷と研究分担者青木がコメントを付け、一定の加筆修正を経た上で、論文を掲載している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

大谷 弘, Wittgenstein on context and

philosophical pictures, Synthese, 査読有,
Vol. 193, 2016, 1795-1816
DOI 10.1007/s11229-015-0809-y

榎野沙央理, Language-Games or misleading expedients for philosophical therapy, Contributions of the 38th Wittgenstein Symposium, 査読有, Vol. 1, 2015, 186-188.

石田恵理, World-Picture propositions in On Certainty, Contributions of the 38th Wittgenstein Symposium, 査読有, Vol. 1, 2015, 138-140

大谷 弘, 言語は規則に支配されているのか、『哲学』, 査読有, 65 巻, 2014 年, 135-140

大谷 弘, World-Pictures in On Certainty, Papers of the 37th Wittgenstein Symposium, 査読有, Vol.1, 2014, 200-202

〔学会発表〕(計 10 件)

大谷 弘, 常識と啓蒙の哲学者としてのウィットゲンシュタイン, 日本イギリス哲学会第 40 回研究大会, 2016 年 3 月 29 日, 学習院大学目白キャンパス(東京都豊島区)

片山文雄, 植民地期 建国期アメリカにおける「常識」の思想 フランクリンを中心に, 日本イギリス哲学会第 40 回研究大会, 2016 年 3 月 29 日, 学習院大学目白キャンパス(東京都豊島区)

青木裕子, 発題: シンポジウム II(ii)イギリス思想における常識と啓蒙の系譜 18 世紀スコットランドから 20 世紀ケンブリッジへ, 日本イギリス哲学会第 40 回研究大会, 2016 年 3 月 29 日, 学習院大学目白キャンパス(東京都豊島区)

榎野沙央理, Language-Games or misleading expedients for philosophical therapy, The 38th International Wittgenstein Symposium, 2015 年 8 月 11 日, Kirchberg am Wechsel, Austria

石田恵理, World-Picture propositions in On Certainty, The 38th International Wittgenstein Symposium, 2015 年 8 月 12 日, Kirchberg am Wechsel, Austria

大谷 弘, Wittgenstein's contextualism and philosophical pictures, Wittgenstein Workshop at University of East Anglia, 2015 年 2 月 11 日, Norwich, UK

大谷 弘, World-Pictures in On Certainty, The 38th International Wittgenstein Symposium,

2014 年 8 月 15 日, Kirchberg am Wechsel, Austria

榎野沙央理, 命令者による見本の提示 ウィットゲンシュタイン『哲学探究』における命令の遂行, 日本哲学会第 73 回大会, 2014 年 6 月 28 日, 北海道大学札幌キャンパス(北海道札幌市)

青木裕子, コモン・センスに依拠した啓蒙思想の系譜, 武蔵野大学政治経済研究所 203 年度第 1 回研究フォーラム, 2014 年 1 月 30 日, 武蔵野大学有明キャンパス(東京都江東区)

大谷 弘, A Wittgensteinian argument against epistemic contextualism, Wittgenstein Meeting at Keio University, 2014 年 1 月 18 日, 慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)

〔図書〕(計 4 件)

青木裕子 他, おうふう, 市民社会論, 2016, 422

青木裕子 他, 極東書店, Adam Ferguson and American Revolution, 2015, 319

青木裕子 他, 晃洋書房, 政治概念の歴史的展開 第 7 巻, 2015, 249

コーラ・ダイヤモンド(編), 大谷 弘・古田徹也(訳), ウィットゲンシュタインの講義 数学の基礎篇 ケンブリッジ 1939 年, 2015, 615

〔その他〕

『研究成果報告書 イギリス思想における常識と啓蒙の系譜とその現代的意義についての研究』(大谷 弘・青木裕子 編, 武蔵野大学人間科学部 大谷 弘研究室, 2016 年 3 月, 128pp) の刊行。

シンポジウム「イギリス思想における常識と啓蒙の系譜 18 世紀スコットランドから 20 世紀ケンブリッジへ」(日本イギリス哲学会第 40 回研究大会, 2016 年 3 月 29 日, 学習院大学目白キャンパス(東京都豊島区)) を開催。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大谷 弘(OHTANI Hiroshi)
武蔵野大学・人間科学部・講師
研究者番号: 30584825

(2) 研究分担者

青木裕子(AOKI Hiroko)
武蔵野大学・法学部・准教授
研究者番号: 60635671

(3)連携研究者

一ノ瀬正樹 (ICHINOSE Masaki)
東京大学大学院・人文社会系研究科・教授
研究者番号： 20232407

片山文雄 (KATAYAMA Fumio)
東北工業大学・教職課程センター・准教授
研究者番号：40364400

古田徹也 (FURUTA Tetsuya)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：00710394

野村智清 (NOMURA Tomokiyo)
東京大学大学院・人文社会系研究科・助教
研究者番号：90758939

佐藤空 (SATOU Sora)
東京大学・大学院総合文化研究科・特任研究員
研究者番号：60749307

(4)研究協力者

榎野沙央理 (MAKINO Saori)
千葉大学大学院・人文社会科学研究科・博士課程在籍

石田恵理 (ISHIDA Eri)
お茶の水女子大学大学院・比較社会文化学専攻・博士課程在籍

篠原久 (SHINOHARA Hisashi)
関西学院大学名誉教授

和田慈 (WADA Megumu)
武蔵野大学非常勤講師

富岡健太郎 (TOMIOKA Kentaro)
本郷高校非常勤講師